

<研究ノート>

古高ドイツ語における ,natura' の訳語をめぐって

丑 田 弘 忍

1. はじめに
2. *bheu- と *gen-
3. ゴート語における φύσις の訳語
4. 古高ドイツ語における natura の訳語
5. おわりに

1. はじめに

「自然」は英語では nature, ドイツ語では Natur であるが、これらは culture, Kultur と同様、ラテン語に由来していることは明らかである。しかし、英語の nature は中英語時代にフランス語から借用されたが、ドイツ語の Natur はもっと古く、9世紀に、ラテン語から直接に借用され、nature がゲルマン語的に第一音節にアクセントが置かれたのに対し、Natur はラテン語の音と形を忠実に模倣し、第二音節にアクセントが置かれ、またそこは長くなっている。この点、借用時における英国人とドイツ人の間では、この語に対する受け取り方はいささか異なったものであったかもしれない。

ヨーロッパの古典二大言語、ギリシア語とラテン語では、「自然」を表わす語はそれぞれ異なっていて、その語根もまた異なっている。「自然」を意味するギリシア語は φύσις で、その語根は *bheu-「成長する、栄える、存在する」(Pokorny 146, Watkins 8)にさかのぼり得、その派生語はアブラウトを伴って、あらゆる印欧語各語派にあらわれでている。

一方、「自然」を表わすラテン語の *natura* は、語根 **gen-*「生む」(Pokorny 373, Watkins 19) にさかのぼり得、この派生語もまた、アプラウトを伴ってあらゆる印欧語各語派に広がっている。

ともあれ、この **bheu-* と **gen-* の両語根の印欧語各語での広がりにもかかわらず、「自然」というような重要かつ基礎概念が、ギリシア語とラテン語というヨーロッパ人の精神を支えてきた重要な文化的言語において、なぜ異なっているのでしょうか、という疑問が生る。まず考えられうることは、*φύσις* にも *natura* にも最初から「自然」の意味が存在したわけではなかったが、次第に *φύσις* が「自然」の意味を得、*natura* がこの意味を受け入れたのではなかろうか。従って、両語における「自然」の意味は最大公約数にすぎないのではなかろうか、ということである。

2. **bheu-* と **gen-*

この2つの印欧語根 **bheu-* と **gen-* に関して、Pokorny (146–150) に基づいて、印欧語各語派でのあらわれ方とその意味を見て行き、*φύσις* と *natura* の意味について検討してみよう。

**bheu-* は **bheu-*, **bhōu-*, **bhū-*, **bhū-* の各母音交替を起こしている。

古代インド語においては、*bhāvati*「なる、在る、居る、起こる、生い繁る」、*bhūti-h*「存在、幸福、繁栄、力」、「存在」の実体を表わす *bhūtá-m*「本質」、「存在」の場所を表わす *bhavitram*「世界」、*bhū man-*「大地、世界、存在」など、「生起」と「存在」の両義であらわれでている。ラテン語においては、*fui*「私はあった」にあらわれる。ゲルマン語派では、「存在」の意味が顕著に発達し、ゴート語 *bauban*, 古アイスランド語 *būa*, 古英語, 古高ドイツ語 *būan*「生む、生活する」(*nhd*, *bauen*「住むために建てる」と、意味は変じた), 古英語, 古高ドイツ語 *bū*, 古アイスランド語 *būd*「住居」などにあらわれる。古代ゲルマン人の住居は木造であったので、「住む」の意味からその材料であるゴート語 *bagms*, 古高ドイツ語 *bōum*, 古英語 *bēam*「木」が成立した。また、「存在する」から、ラテン語と同様に、存在動詞の古英語 *bēo* (*ich bin*), 古高ドイツ語 *bim* (*ich bin*), *bist*

(du bist) などにあらわれている。このようにゲルマン語派においては、*bheu- の有する「成長する, 栄える」の意味よりも、「存在する」の意味の方が顕在化し、そこに力点が置かれ、具体的に多様化したと思われる。

ギリシア語においては、*bheu- から φύω (φύομαι) 「生み出す, 成長する (特にホメロスにおいては植物の場合), なる」が成立する。この名詞形が φυτόν 「植物」, φυή 「成長」 及び φύσις である。この φύσις なる語は, φύω に, 古インド語の -ti- に対応する名詞構成要素語幹 -σι- と接尾辞 -s が加えられて成立した行為名詞 (nomen actionis) である。従って, この語の原初的な意味は, 「生成とその結果」であったが, 「結果」として定常する「物そのもの」, 即ち「物の本質」と意味を発展させ, また, 「生成するあらゆる物」の意味から, 「万物・自然」となった。

他方, natura の語根 *gen- は, *gon-, *gñ-, *gn- の各母音交替を起こしている。

古代インド語には, 次のような語にあらわれる。*gen- の原初的な意味からの jānati 「生む」, ja- jñ- é 「生まれた」, jā yatē 「生まれる」, jāta-h 「生まれつきの」など。語根に行為名詞構成要素 -ti- を伴って, jāti-h 「誕生」, 行為者名詞 (nomen agentis) 構成要素 -ter- を伴った janitār- 「父」, jānitri 「母」など。また「誕生」が累累となされた結果を示す jāñah 「種族, 一門」, jā-s 「子孫」など。ギリシア語には, γίγνομαι 「生まれる, 生じる」, γεννάω 「生む」, janitār, jānitri に対応する γενέτωρ, γενέτειρα 「母」, 行為名詞として γενετή 「誕生」, γένεσις 「生成, 誕生」, さらに「誕生」の意味が古代インド語同様に展開され, γένος, γενεά γενέθλη 「誕生, 一門, 血統, 種類」, γόνος, γονή 「産出, 誕生, 種類, 子孫」などがあらわれる。ラテン語では, 古いラテン語の geno 「生む」, γένεσις に対応するが, 元来の意味を失ってしまった gens 「種類, 子孫」, γένος に対応して幅広い意味を持つ genus 「誕生, 家門, 血統, 種類, 方法」などがあらわれる。また, ラテン語においては, 零階梯 *gn- の g は落ちる傾向にあり, そのようにして成立したのが, nascor 「生まれる」, natio 「誕生」, natus 「息子」や当の natura である。この natura は, nascor の完了分詞 nat- に -ura が

付加されたもので、同じく、-ura を伴っている *cultura* が *colo* 「耕す」の完了分詞幹 *cult-* に -ura が加えられて、「耕された状態」を意味するのと同様に、*natura* は元々「生れついでの状態」を表わしている。ゲルマン語派では、*jātá-h* に対応する古アイスランド語 *-kundr*、ゴート語 *-kunds*、古英語、古ザクセン語、古高ドイツ語 *-kund* 「～に由来する」、零階梯の *natio* に対応するゴート語 **knops* 「民族」(文献上は与格単数 *knodai* のみが見られる)、古高ドイツ語 *knuot* 「民族」、古高ドイツ語 *knuosal* 「民族」、*gens* に対応するゴート語 *kindins* 「総督(「民族の長」からであろう)」、古アイスランド語 *kind* 「民族、性質」、古高ドイツ語 *kind* 「子供、子孫」、古英語 *cynd* 「民族、性質」など。さらに、ゴート語 *kuni* 「民族」、古高ドイツ語 *kunni* 「民族」、古アイスランド語 *konr* 「息子」、古高ドイツ語、古ザクセン語 *kuning*、古英語 *cyning*、古アイスランド語 *konungr* 「王、(「民族の長」から)」などがみられる。

このように、印欧語根 **bheu-* も、各語派に分裂してしまった後も、各語派の内部において多くの派生語を成立させ、その意味を発展させていったにもかかわらず、各語派にまたがる共通の意味を荷なおわせることになった。やはり、本の語が同一であれば、意味の発展の在り方も似通うものである。

先にも挙げた如く、**bheu-* は、元来、「成長する、存在する」の両義であったが、ギリシア語では、「生長、生成」が強調され、*φύσις* に至って、「生成とその結果」なる「本質」へと発達し、他方では「万物・自然」となる。**gen-* は **bheu-* が植物的であるのに対して、動物的に「生む、生ませる」の意味を表わし、その派生語 *natura* は「生まれついた状態」から「物の本質」へと意味を発達させた。元々の語根は異なっているにもかかわらず、ここまでは、*φύσις* も *natura* も同義的に発展した。それには、両方の語の根底に、「生じてある」の意味が存在しているであろうからである。このことを、アリストテレスは、「形而上学」第5巻第4章において的確に語っている。*φύσις λέγεται ἓνα μὲν τρόπον ἢ τῶν φνομένων γένεσις* 「ピュシス(自然)というのは、その一つの意味では、生長する事物の生成をいう……

(出隆訳)」。ここには *φύσις* と *gen- に由来する *γένεσις* が用いられて、同義的となっている。しかし、なかなか *natura* は「万物・自然」の意味には至らなかった。ラテン文学において、最初に *natura* なる語があらわれるのは、プラウトゥス (Ca 254–184 B. C) とテレンティウス (185–159 B. C) においてであり、そこに用いられている意味は *ingenium* 「天性、本性」の類語としてであり、「万物・自然」の意味はなく、またその数も少ない。プラウトゥスでは、*natura* 1 例に対して、*ingenium* 75 例、テレンティウスでは *natura* 4 例に対して *ingenium* 38 例である (A. Pellicer: *natura, étude sémantique et historique du mot latin* 93)。最初に、*natura* を *φύσις* の意味で用いたのは、ギリシア哲学の影響を受けたキケロであったろう。しかし、*natura* に、全く「万物・自然」の意味が具なわっていないかとは言い切れない。*natura* には *φύσις* の有する「万物・自然」の意味を受け入れるだけの素地は具わっていたにちがいない。即ち、*natura* の語根にあらわれる「生む、生ませる」が「万物を生む」の意として潜在的に、この語の中に保たれていたにちがいない。そして、キケロにおいて *φύσις* の意味と概念が *natura* にすべてもり込まれ、後世に至ったと思われる。

3. ゴート語における *φύσις* の訳語

古代ゲルマン人たちは恐らくギリシア・ラテン的な意味の *φύσις* (*natura*) の概念を知らなかったであろう。従って、ゲルマン語には *φύσις* (*natura*) の全意味内容をカバーする語はない。ゲルマン語で現存する最も早い資料はゴート語のウルフィラによる聖書翻訳であって、ゲルマン人として最初に *φύσις* なる語に接したのはこのゴート人であったであろう。ゴート語の聖書に使われた部分には、*φύσις* の意味の一部しかあらわれていないが、ウルフィラは3通りのゴート語でこれを翻訳している。しかしそこには *bheu- に由来する語はなく、一語は *gen- に由来しているが、他の二語は全く異なった語根に由来している。

さて、新約聖書の *φύσις* の用法を、Walter Bauer は A Greek-English

Lexikon of the New Testament and Other Early Christian Literature (英訳版 1957) において、①natural endowment or condition ②natural characteristics or disposition ③nature as the regular natural order ④natural being, product of nature, creature の4つ分類している。ゴート人ウルフィラはこれらの意味をいかに自己の言葉によって表わそうとしたであろうか。ウルフィラは新約聖書の φύσις を、aljakuns, gabaurths, wists の3つのゴート語で訳しているが、この3つの語の間に、何らかの意味の差が存するのか、存しないのか、また φύσις の意味の区別によって訳し分けられているのか、いないのであろうか。

新約聖書のゴート語訳の中で、φύσις の訳語としてこの3つのゴート語があらわれるのは、次の個所においてである。Ⓐ εἰ γὰρ ὁ θεὸς τῶν κατὰ φύσιν κλάδων οὐκ ἐφείσατο, μήπως οὐδὲ σοῦ φείσεται = þandei guþ þans us gabaurþai astans ni freidida, ibai aufto ni þuk freidjai (ローマ XI, 21) 「神がその木の元来あるべき枝をさえ惜しまれなかったのなら、あなたをも惜しまれないからである」 Ⓑ ἐν οἷς καὶ ἡμεῖς πάντες ἀνεστράφημεν ποτε ἐν ταῖς ἐπιθυμίαις τῆς σαρκὸς καὶ τῶν διανοιῶν, καὶ ἡμεῖς φύσει τέκνα ὀργῆς ὡς καὶ οἱ λοιποὶ = in þaimei jah weis allai usmetum suman in lustum loikis unsaris, taujandaus wiljans leiks jah gamitone, jah wesum wistai barna hatize swaswe jah þai anþarai (エペソ, II, 3) 「彼らの中にあって私たちもみな、かつては肉の望みのままに生活し、肉と不義の思いに従い、他の人々と同じく本来は、怒りの子であった。」 Ⓒ εἰ γὰρ σὺ ἐκ τῆς κατὰ φύσιν ἐξεκόπης ἀγριελαίου καὶ παρὰ φύσιν ἐνεκεντριάθης εἰς καλλιέλαιον, πόσῳ μᾶλλον οὐ τοι οἱ κατὰ φύσιν ἐγκεντρισθήσονται τῇ ἰδίᾳ ἐλαίᾳ; = jabai auk þu us wistai usmaitans þis wilþeins alewabagmis jah aljakuns wisands, intrusgans warst in godana alewabagm, ꝥan filu mais þai bi wistai intrusgjanda in swesana alewabagm? (ローマ XI, 24) 「あなたが生来属している野生のオリーブから切られ、その本性にもとってよいオリーブに接ぎ木されたのなら、ましてや本来その木にあるべき枝を元の木に接ぐの

は容易であろう」。④ *ἀλλὰ τότε μενούκ είδότες θεόν έδουλεύσατε τοίς φύσει μὴ οὖσιν* *Αεοίς* = *akei þan sweþauh ni kunnandans guþ, þaim þoei wistai ni sind guda skalkinodeduþ* (ガラテヤ, IV, 8) 「かつて、あなたたちは神を知らず、本質として神でないものの奴隷であった。」④の *κατὰ φύσιν*, ⑤の *φύσει*, ⑥の *κατὰ φύσιν* は Bauer の分類の①に該当し, 「生まれながらの生来の」の如き意味で, ⑥の *παρὰ φύσιν*, ④の *φύσει* は②に該当し, 「本来の性質, 本性」の如き意味であると考えられる。この分類をゴート語の訳語と比較してみると次のようになる。

	gabaurths	aljakuns	wists
①	+	—	+
②	—	+	+

wists は①と②に, gabaurths は①にのみ, aljakuns は②にのみ用いられている。このように, ここでは一応分けられて用いられているが, 例が限られているので, 広くこう言うことが出来るかは問題と言えよう。次にこの3つのゴート語の単語が, 本来どのような意味を有し, どのように発展していったかを見てみよう。

gabaurþs は印欧語根 *bher- 「もたらす, 運ぶ」にさかのぼり得る (Pokorny 128–132, Lehmann 134)。この語根は, この意味のまま, 古代インド語 *bhárati* 「担う」, ギリシア語 *φέρω* 「運ぶ」, ラテン語 *fero* 「運ぶ」, アルメニア語 *berem* 「運ぶ」などにあらわれる。ゲルマン語では, ゴート語 *baíran* にあらわれるが, 原義的な「運ぶ」の意味から「産む」の意味へと発展し, 同義にて, 古アイスランド語 *bera*, 古英語, 古高ドイツ語 *beran* があらわれる。これにアプラウトを伴なって, 行為名詞構成要素語幹 *-ti-* が加わって成立したのが, 当のゴート語 *gabaurths*, 古アイスランド語 *byrd*, 古英語 *gebyrd*, 古高ドイツ語 *giburt*, 古ザクセン語 *giburð* などであり, 「誕生, 出生」を第一義としている。その語構成の在り方と意味は *-ai-* を伴っている *γένεσις* と似ている。しかし, *gabaurths* 等は, *natura* の意味の発展と平行して, 「誕生」から「生まれながらの」の意味に発達させた。この意味において, ウルフィラが *φύσις* の訳語として,

この語を用いたのは、この語の意味の流れを確実に、語感的に感じとった結果として当然のことであつたであろう。

aljakuns は aljis と kuni の合成語である (Lehmann 27)。aljis はギリシア語 ἄλλος, ラテン語 alius と同系統 (Pokorny 25) で、「異なった」の意味であり、kuni は、先に挙げた如く、natura と同語源の *gen- に由来しており、古高ドイツ語 chuni と同じく「種(族)」を意味している。従って、aljakuns は全体で、「異なった種の」の意味となろう。ロマ書の接木の比喩において, παρα φύσιν 「本性に反して」全体が「種を異にする」と解釈され、aljakuns と訳されたのは、やはり適切であると言わざるを得ない。

Bauer の分類の①と②の両方の意味の訳語となっている wists は印欧語根 *ues- 「とどまる, 住む」に由来し、古代インド語 vasati 「とどまる」、ギリシア語 ἄεσα 「すごす」、ラテン語 Vesta 「炉の女神」などにあらわれる (Pokorny 1170–71, Watkins 78)。この語根はゲルマン語派においては、ゴート語 wisan 「とどまる」、古アイスランド語 vesa 「存在する」、古英語、古ザクセン語、古高ドイツ語 wesan 「存在する, とどまる (今日の Wesen)」などにあらわれる。これは、「存在」という点で、*bheu- の有する意味の一部と共通している。動詞形に名詞構成要素 -ti- が加わって成立したのが、当のゴート語 wists, 古アイスランド語 vist, 古英語、古高ドイツ語 wist であって、「存在」、それに備わる「本質」を第一義としている。従って、wists は Bauer の分類の②の意味に相当しているが、ウルフィラは①の意味の訳語としても用いている。これは、ゴート語内での wists の意味の展開によるものとも考えられうるが、φύσις = natura の語義が強く反映しているのではなからうか。

このようにゴート語においては、φύσις に完全に相応する語はなく、上の3つの語でもって、φύσις の意味の一部を表わすのみであった。

4. 古高ドイツ語における natura の訳語

古高ドイツ語の文献の大半は、ラテン語からの翻訳によるもので、この翻訳を通じての語創造によって、古高ドイツ語の語彙は飛躍的に発展し

た。今、ラテン語 *natura* が古高ドイツ語にいかにあられでるかを、「ベネディクトゥス会会則」からノートカーまで、追ってみたいと思う。

ラテン語 *natura* が古高ドイツ語に初めて翻訳されたのは、9世紀初頭の行間翻訳 (Interlinearversion) である「ベネディクトゥス会会則 (Benediktnerregel アレマン方言)」, およびそれと相前後しての、いくつかの「対訳語彙集」(Glossen) においてであろう。古高ドイツ語の翻訳の歴史は、まず Glossen がなされ、ついで行間翻訳がなされたと、言われているから、まず Glossen において *natura* が初めて訳されたのかもしれない。

「ベネディクトゥス会会則」では, *cnuat* が *natura* と *necessaria* の訳語として用いられている。④ *Ergo praeparanda sunt corda nostra et corpora sanctae praeceptorum aboedientiae militanda; et quod minus habet in nos natura possibile, rogemus dominum, ut gratiae suae adhibeat nobis adiutorium omnis terrae = keuuisso ze karauuenne sint herzun unseriu indilihhamun dero uuihono piboto dera horsamii ze chamfanne; indi daz min hebit in uns chnuat samftes, pittames truhtinan, daz dera ensti sinera zuatue uns helfa eocouuelihera erda* (190,8) 「従って、我々は心と肉体とを彼の命令の聖なる服従のために戦うべく、準備しなければならない。我々の内なる本性はそれがあまり出来ないで、主に願わねばならない、恩寵の手を我々のために地上に与えたまわんことを。」⑤ *Tertium vero monachorum deterrimum genus est sarabaitarum, qui nulla regula adprobatu experientia mazistri sicut aurum fornacis, sed in plumbi natura molliti.... = Dritta keuuisso municho uuirsissta chunni ist lihhisarro, die noh dera rehtungu kechorote pifindungu des meistes soso cold des ouanes, uzzan in pliuues chnuati keueihhete* (196, 29) 「修道士の第三の最低の種類は、破戒僧である。彼らは、かまどの中の黄金のように、教師の経験によっても、いかなる規則によってもためされず、鉛の特徴のようにやわらかい。」⑥ *fratres ad necessaria exeant = pruader za notdurfti dera cnuati uzkanen* (218, 25) 「修道士たちが肉体の要求のために出て行かねばなら

ない。」これらの *natura* は「本性、特質、本来性」などの原初的な意味で用いられていて、これらはすべて *cnuat* のみによって訳されている。この「ベネディクトゥス会会則」の訳者は *natura* の訳語に *cnuat* しか思い浮かばなかったのであろう。

先にも、挙げた如く、*cnuat* は、*natura* と同様、印欧語根 **gen* に由来し——もちろん「ベネディクトゥス会会則」の訳者が、このような語源的な関係を知っているはずもない——ゴート語 **knops*, 古英語 *cnosl*, 古ザクセン語 *cnōsal*, 古高ドイツ語 *chnuosal* と同系であり、その意味はおしなべて「民族」である。**gen-* が有している「生む」の行為が累累となされて来た結果として得られた意味であろう。これらは、語源的にラテン語 *natio* に対応し、原ゲルマン語 **knop-* が推定されうる。なお *cnosl* 等に伴なう語尾 *-s(a)l* は具体化表示である (H. Krahe *Germanische Sprachwissenschaft* III S. 89)。ゴート語では、**knops* として推定される形はあらわれず、与格 *knodai* 一例のみが *γένος* の訳として、「フィリッピ人への手紙 III, 5」の中で、*περιτομῇ ὀκταήμερος, ἐκ γένους Ἰσραήλ, φυλῆς Βενιαμείν, Ἑβραῖος ἐξ Ἑβραίων, κατὰ νόμον Φαρισαῖος* = *bimait aht-audogs, us knodai Israelis, kunjis Bainiameinis, Haibraius us Haibraium, bi witoda Fareisaius* 「割礼の点では八日めに受けた者、イスラエル民族に属し、ベニアミン族に族し、ヘブライ人の中のヘブライ人、法律の点ではファリサイオス派の者」。この個所はウルガータでは、*circumcisisus octavo die, ex genere Israel, de tribu Benjamin, Hebræus ex Hebræis, secundum legem pharisæns* となっている。つまり、*γένος*—*genus*—*knodai*, *φυλῇ*—*tribus*—*kuni* というふうには、「民族」と「部族」の違いがあらわされているが、しかし *kuni* は他の個所では *genus* の訳語としても使われているので、語自体としては明確に区別されているわけではない。古英語の *cnosl* は C. W. M Grein の *Sprachschatz der angelsächsischen Dichter* によれば、*Nachkommenschaft, Geschlecht, Stamm, Blutsverwandte* であり、Bosworth の *Anglo-saxon Dictionary* においても *race, progemy, offspring, kin, family* の意味が与えら

れていて、大は「民族」から小は「縁者」までの血の紐帯がこの意味の中心となっている。古ザクセン語の *knôsal* も *Geschlecht*, *Stamm* の意味で使われている。古高ドイツ語の *chnuosal* は「ヒルデブラントの歌」に *eddo hwelihhes cnuosles du sis* (v. 11)「それともお前はどこの一族か」として、及び *Monseer Fragment* (8世紀) に, *progenies uuiperarum*「まむしの末たち (マタイ XII, 34)」の訳語として *natrono chnosles* が, *gemina uuiperarum*「まむしの末ども (マタイ XXIII, 33)」の訳として *natro knosles* があらわれているにすぎなく、古高ドイツ語の初期にのみ使用される語である。-sal を伴わない *knuot* は「ベネディクトゥス会会則」以外の古高ドイツ語の文献では、*Glossen* と「ヴァイセンブルク教理問答」(*Weissenburger Kathechismus*)に見られる。*Glossen* では 9 / 10 世紀の *Codex S Floriani III 222B* に *consparsio chnôti kapurt* (*Ahd Gl II 281, 66*) と 10 世紀の *clm 14747* (*Ahd Gl II 328, 6*) に *genealogiam chonot* とあるにすぎない。共にバイエルン方言である。前者のラテン語 *consparsio* の意味の把握はやっかいである。この語は *conspargo* の名詞形であって、「水をまくこと、水でまぜたパンの生地」の意味であるが、*kapurt* が並んで記されていることから、それではここに合わない。やはり比喩的に用いられているにちがいない。英国の中世ラテン語文献を扱っている *Dictionary of medieval latin from british sources* では *conspersio* は①sprinkling ②mixture of ingredients, complexion, temperament として説明され、②の例として *conspersione gecynde* (*Anglo-Saxon and Old English Vocabularies*) が挙げられている。*gecynde* は「本性、性質」などの意味である。やはり *chnôti* も *kapurt* もここでは「本質、本性」などの意味であって、*natura* の意味の一部を表わしている。後者のラテン語 *genealogia* も比較的新しいラテン語で、元々は「家系図」の意味であったが、「血筋、血統、一門」の意味になった、この *chonot* はこの意味で用いられていることは明らかである。また、790 年頃成立して、南ラインフランケン方言で書かれている「ヴァイセンブルク教理問答」では、次の如く *cnuat* が 3 例見られ、*substantia* の訳語として

あらわれている。Fides autem catholica haec est, ut unum decem in trinitate et trinitatem in unitate veneremur, neque confundentes personas neque substantiam separantes = Gilauba allichu thisu ist, thaz einan got in thrinisse endi thrinissi in einnissi eremes, Noh nigmisgente thio gomoheiti noh thea cnuat citeliente 「他方において、カトリックの信仰は、三位一体における唯一の神と一性における三位一体を尊重するもので、位格を結合し、実質を分離するものではない」。

Dens est ex substantia patris ante saecula genitus, et homo est ex substantia matris in saeculo natus = Got ist fona cnuati edho samanuuisti fateres er uueroldom giboran, endi man ist fona cnuati muater in uuerolti giboran 「神は父の実体から有史前に生まれ、人は有史後に母の実体から生まれた」。

このように、knuot は genus に相応する意味と、ingenium, substantia に相応する意味とを有していた。原ゲルマン語 *knop にすでにこのような両方の意味が備わっていたかもしれない、いずれにせよ natura の意味をカバーしている。従って、「ベネディクトゥス会会則」の訳者は、語の伝統をふまえて natura の訳語を選ぶさい、knuot が最も近いと考えたであろう。もちろん natura の有している意味をすべて knuot で表わすことは出来ない。しかしずれはほとんどない。

この「ベネディクトゥス会会則」と相前後して、natura 及びその訳語があらわれるのは、810-17年にライヒェナウで成立したと推定され、アレマン語で書かれている「ムルバッハ領歌」(die Murbacher Hymnen)である。これはアンブロシウス(340-397)の領歌を含む行間翻訳で、かなり正確に訳されている。ここに一度だけ natura が kapurt = giburt に訳されている。Aeterne lucis conditor, lux ipse totus et dies, noctem nec ullam sentiens, natura lucis perpete = euuiges sceffento leoht er selbo aller inti tak naht nnc eimiga intfindanter kapurt leohtes emazziges (IV, 1) 「永遠なる光の創造者よ。光にして全き日。夜を感じない、永続する光の本質よ」。ゴート語の所で述べたように、giburt と

natura は語源を異にしているが、その意味は似通って発達している。「生む」から「本質」へと意味を変えたのであろう。すでに、さらに古い Abrogans (8世紀, アレマン語方言) にも, natura-kapurt が見られる (Ahd, Gl I, 126. 40) ところから, natura = giburt はこの意味で定着していたであろう。古高ドイツ語時代の初期には, ラテン語 natura は伝統的に knuot か giburt で表わされていたのであろう。

次いで, natura が古高ドイツ語の文献にあらわれるのは 863–871 年に成立したラインフランケン方言で書かれたオトフリート (Otfrid) の福音書である。これは翻訳作品ではないがウルガータが原拠となっているので広い意味で翻訳作品と呼んでもよいであろう。ここに 2 例 natura が用いられているが, もはやラテン語そのものではなく, ドイツ語文の中にあって外来語として機能し, ドイツ語の曲用をも取っている。 natura in ni fliehen joh zi ébine jizíehē (III, 3. 22) 「我々のうちなる生まれながらの特性を無視することなく, それを等しく扱うよう。」 Joh íamer westin thánne thie sine hólðon alle, thie tho thár warun joh ouh sídor quamun, Tház er in natúru was sélbo ther zi wáru (V, 12, 47–49) 「そこに居合わせたか, 後にやって来た彼 (キリスト) に忠実な者たちはすべて, 彼が実体において, まこと同じ人であることを常に知るであろう」。

このオトフリートの年品こそ, ドイツ語 Natur の歴史にとって画期的と言わざるを得ない。オトフリートこそ旧来からの在来語でもって natura に相応する語を当てることをせず, ドイツ語史上初めて, 文献の上で, 外来語としてラテン語 natura をドイツ語に移入した人であった。その際, 彼はラテン語のアクセントをドイツ語的に語頭に移動させることをせず, ラテン語のままに, -u- の上に置き, ラテン語の natura に込められている感情と精神をそのまま受け継ごうとしたのである。しかし, 語形の上では, ドイツ語の曲用に従わせ, ö- 語幹 (例えば, gēba, gēba, gēba, gēbōno, gēbōn, gēbā) を与えている。これはノートカーに受け継がれることになる。意味の点では, 前者の文では, ingenium, 後者の文では substantia の意味で用いられていて, 依然, ラテン語 natura の意味でしかない。

古典古代とキリスト教の素養を十二分に有し、その言語駆使力において比類ない古高ドイツ語時代末期の最大の翻訳者はガングト・ガレンのノートカー・ラベオ (ca 950–1022) である。彼は *natura* の翻訳の際にも、細心の注意を払ったにちがいない。ラテン語 *natura* (*naturalis*, *naturaliter*) はノートカーによって約 10 種類の古高ドイツ語に訳されているが、原語の意味の差によって訳し分けられているのか、どうか、作品の種類によって、訳語のパターンが定められているかどうか、コンテキストによって訳し分けられているか、どうか、訳語を使い分けることによって、何が問題にされたか、等を、彼の翻訳作品、ボエティウスの「哲学の慰め (Nb)」, アリストテレス (ボエティウス) の「カテゴリー論 (Nk)」及び「命題論 (Ni)」, マルティアヌス・カペラの「文献学とマーキュリーの結婚 (Nc)」, 「聖書詩篇 (Np)」において、一語一語検討していくことにする。

(1) *anaburt*, *anaburti*, *anaburtig*

anaburt, *anaburti* はノートカーにのみ、*anaburtig* はノートカーと Glossen にのみあらわれる、古高ドイツ語においてはあまり使用されることのなかった語である。*anaburt*, *anaburti* はノートカーにおいて *natura*, *generatio* 「発生, 種類」, *secundum se* 「それ自体」の訳語として、*anaburtig* はノートカーにおいては、*naturalis*, Glossen においては *innatus* 「生来の」, *indigenus* 「天性の」, *genuinus* 「生来の」, *ortus* 「生じた」の訳語として用いられている。これらの語にそれぞれ、中世オランダ語 *aenboort(e)*, *aenboortich*, 中世低地ドイツ語 *anbört*, *anbortich* (中世低地ドイツ語の語形と意味については未見にて未調査) が対応しているが、中世オランダ語は「縁者 (の)」の意味を有し、古高ドイツ語とは意味のずれが生じている (J. Verdam: *Middelenderlandsch Handwoordenboek* 9)。従って、西ゲルマン語時代に、共通語として成立したのではなく、9世紀の Glossen にすでに見られるところから、古高ドイツ語時代の初, 中期に、高地ドイツ語地域で成立し、若干意味を変えて北へ広がっていったと推定される。

anaburt は副詞 ana と burt (beran 「生む」から) から構成されていて、原義的には全体で、「生まれに基づいて」を意味するであろう、それが「生まれながらの(天性、本性)」へと意味を発達させ、さらに「それ自体、実体」と広げていったであろう。

ノートカーにおいてこの anaburt(i), anaburtig は Nb (1 例, naturalis の訳語), Nk (2 例, 1 例は secundum naturalem substantiam の訳語, 1 例は generatio の訳語), Ni (2 例とも secundumse の訳語), Np (6 例とも natura の訳語) の諸作品にあらわれる。以下それぞれの作品から若干挙げてみよう。Atqui, si hoc munus, i. reuerentia naturale foret dignitatibus, quoque gentium, i. ubique terrarum. nullomodo cessaret al offitio suo = Uuâre diu êrhâfti ánabúrtig tien ámbahten. sô negesuíche si in nionêr (Nb. 159, 20-24) 「ところがもしそうしたことが、栄位の本来の任務であるならば、栄位はその任務を、どこであろうと断じて怠らないでしょう」。Siue enim secundum naturalem substantiam. dallor aut nigredo facta est. qualitates dicuntur. quales enim secundum eas dicimur = Úbe uóne ábabúrte. pléichi álde suárzi geskihet. táz sint qualitates (Nk 100, 24-27) 「というのは、自然に基づく組織のうちに蒼さ、あるいは黒さが生じている場合にも、それは性質と言われる」。Magis autem in unoquoque est uera. s. opinio quae secundum se est. = Nû ist ter uuân ío uuarera. ter ánaburtiges tîngis ist (Ni 101, 7-9) 「それ自体に即した判断はそれぞれのものについて一層多く真である」。Et non est substantia. Vnde ne-sint siê ne-hein uuíht. Daz chit. Siê ne-sint niêuuíht uuiht. Vnde sô súndig hóro. ne-ist niêht diû substantia (uuist). diâ ih suôf. uiciatam naturam (firchústa anaburt) ne-scuóf ih niêht (Np 234, 15-18, ps 68) 「足がかりになる物もない。それらは実体ではない。私が創造した実体は罪ある人間ではない。私は墜落した実体を創造しなかった」。Quia domini est assumptio nostra, et sancti israhel regis nostri, Vvanda truhtenes ist unser ánanemunga. unde unseres chúninges israhelis hêi-

ligen. Er nám an sih unsera naturam (anaburt). do er incarnatus (gelichamot) uuard (Np, 326, 22–25)「われわれを保護するのは主のもの、イスラエルはわれわれの聖なる王のものであるから。主が受肉された時、主は我々の姿をとられた」。anaburt は他の作品に比べて宗教的作品である「詩篇」の翻訳に比較的に多く使われている。anaburt の原義は「生まれながらの」に近いと思われるから、「その物のありうべき」、つまり、ラテン語の *propius* の意味で用いられていると思われる。

(2) *ánauuíst*

anauuist は ana と uuist に分析されうるが、uuist はゴート語のところで挙げた如く、「存在、本質」を意味し、広くゲルマン語に広がっている(古アイスランド語 *vist*, 古英語 *wist*) が、合成語 anauuist はノートカーにしかあらわれない。古英語の *onwist* は形式的には対応しているが、これは *gesealde sigora waldend onwist éctles Abrahames sunum* (Bosworth and Toller: An Anglo-Saxon Dictionary)「主は、アブラハムの子孫たちにある国に住まうことを認めた」の如く、*onwist* は「ある場所での滞在」を意味し、*anawist* との意味のズレが見られるところから、互いに影響されることなく、別々に成立したのであろう。もし共通の起源が存在するならば、もっと広くゲルマン語内に共通の意味を有して広がっていなければならないであろう。従って、anauuist はノートカーによる新造語と考えられる。この語はノートカーにおいても使用されること少なく、Np に3回用いられているにすぎず、また *natura* の訳語としては1回のみである。Et quis similis erit deo in filiis dei? Vnde uuer ist in gotes súnen Góte gelih? Daz sie sint per gratiam (durch kenâda). daz ist er per naturam (durh ánauuist) (Np 324, 8–10)「神の子らの中で、誰が神の子に似ているでしょう。天使は恩寵によるが、キリストは内在的な本性による」。

基礎の uuist は、ゴート語同様、「物事の存在、本質」を表わし、この ana-以外に *chorn-*, *mite-*, *sament-*などを伴って合成語を形成してい

る。例えば chornuuist は frumentum「小麦」の訳語 (Np 339, 12) として用いられているが、これは単なる小麦ではなく、殻を取り除いた中の部分と考えられる。したがって、anauuist は「内なる本性 (質)」と解してよいであろう。

(3) bero(a)haft

この語に関連する一連の語が古高ドイツ語に存在する。berahaft, berahaftig, berahaftigen, harahafton, giberahafton である。このうち、berahaft は fecundus「豊かな」の訳語として 13 世紀のバイエルン方言の Glossen とノートカーにのみあらわれる。berahaftig は fertilis「実りのよい」の訳語として、12世紀のバイエルン方言の Glossen に見られる。その他の語はノートカーにのみ用いられている。恐らく、これら一連の語はノートカーによって創造され、上部ドイツ語地域一帯に広まり、中世を通じて、方言として現代にまで及んでいる。例えば、Schweizerisches Idiotikon IV. 1477-78 には「実りをもたらす、多産な」の意味で, berhaft, Bërhafti が載せられている。berahafti は beran「もたらす」+ haft「結ばれた」+ i から成り立っていて、全体で「産むにかかわる (こと)」を表わしたであろう。-i はアレマン方言特有の形容詞からの名詞構成要素である (W. Henzen: Deutsche Wortbildung S, 172)。ノートカーはこの語をただ一個所, natura の訳語として用いている。Fomes sensificus. Sinmachig zinselôd. Unánda álte líute uuândon. sih sêla únde sín háben fóne sole. únde lichamen fóne Iuna. Mentis fons. Mûotes úrspring. Táz íst óuh nâh témo uuâne. Lucis origo. Liehtes ánagenne. Sô íst óuh táz. Regnum naturae. Chúning tero bérohafti. Súnna gehérhaftot álliu dín (Nc 154, 1-6)「感情のほぐち。古人は、心は太陽から、肉体は月から生じると、考えていたが故に。心の泉。こうも考えられている。光の始まり、これもしかり。自然の支配者。太陽はあらゆる物を豊かにする」。文献学が神 (太陽) に祈る個所である。この個所はプリニウスの「博物誌 (Naturalis historiae)」の hunc esse mundi totius animum ac

planus mentem, hunc principale naturae regimen ac numen credere decet opera eius aestimantes (nat, II IV. 13)「それ(太陽)が世界の心であり、より明白に精神であること、自然の第一の支配者にて神性であることを信じることは、その働きを判断すれば、当然である」という内容に一致している。ノートカーもプリニウスをひもといたであろう。regnum naturae = chúnig tero berohofti = sunna として、ノートカーは古典に倣い、太陽はあらゆる物をその光によって豊かにすると、注を加え、natura を berohofti と解釈し、翻訳した。

(4) burt, geburt

burt (beran から) が natura の訳語として用いられているのは、anaburt と平行して使われている Np においてのみである。Et conuersus uiuificasti me. et de abyssis terrae iterum reduxisti me. Vnde doh pechêrter ze mir. bechíhtost dû mih an dînero resurrectione (urs-tende). unde leitost mih áber ánderêst úzer déro fiêffi déro erdo. uuanda ih an dir irstándener. áber an mir selbemo irstân sol. Dû irstuônde er in nostra natura (unserro burte) dara nâh irstanden uuir in eadem natura (dero sello anaburte) (Np 249, 17-22)「あなたは私を再び生き返らせ、地の深みから、再び私を引き上げられた。私はあなたにおいて生き返らせられ私自身において生き返らねばならないが故に。あなたはかつて我々の姿において生き返られた。後には我々は同じ姿において生き返える」。このように anaburt と全く同義で用いられている。同じ個所での同じ語を避けたためと思われる。

geburt は、すでに8世紀以来、Glossen に natura の訳語としてすでにあらわれている。ノートカーでは generatio 「発生」、incarnatio 「受肉」、semen 「種子」、fecunditas 「豊饒」の訳語としてあらわれるが、特に natura に関しては non naturaliter の訳語として Nk にあらわれる。Similiter autem et quaecumque alienationes non naturaliter. sed ab aliquibus casibus factae surt. difficile praetereuntes. et omnino im-

mobiles. etiam huiusmodi qualitates sunt = Úbe óuh nâh tero geb-
úrte. uóne dehéinên geskíhten mánne únsínnigina chóment. stétise
unde uuírige. táz sínt io sô sámó qualitates (Nk 102, 10–15) 「しか
し自然的なものではなくて、何らその他の付随的なものどもから生じてき
て取り去り難いもの、あるいはまた全く動かせないものとなっている忘我
もそのようなものどもも、同様に性質と言われる」。この naturaliter は
「本来的な、生得の」の意味であろう。しかるに anaburt と訳されてもかわ
りはないと思われる。

(5) ding, uuechselding

古典 (ウェルギリウス, ホラーティウス, キケロ, ルクレティウス) 以来
の用法に rerum natura 「万物の秩序 (本性, 本質)」という表現があるが,
ボエティウスもその Consolatio philosophiae においてこの表現を 6 回用
いている。ノトカーは、この rerum natura を翻訳するにあたって, diu
natura (Nb 101, 17; 387, 25), aller dingo natura (197,5: 253, 24),
alliu ding(196,12; 235, 24) の三通りに訳し分けられている。Numquam
faciet fortuna tua esse. quae natura rerum a te fecit aliena = Tír
nemág tiu fortuna dáz nieht kegében. tés tíh fiu natura hábet
keûzôt (Nb 101, 16–19) 「そもそもの成り立ちからあなたとは縁のないも
のを、運命は決してあなたのものにしないでしょ」。Quisquis inquam
dubitatur. nec rerum naturam nec consequentiam potest considerare
rationum = Souuér des zuíuelôt chád ih. fér nebechénnnet tero dingo
naturam. nóh uuélih véda nôte ánderro fólgee (Nb 253, 23–27) 「誰
にしるそれを疑う者は、事柄の本性も推論の帰結も考察することができま
せん」。An aliquod huiusmodi bonum. quale paulo ante diffinisti. in
rerum natura possit existere = Úbe dehéin sô getân gûot. múge sín
únder állên dingen. sô dû dâr-fóre geóugtôst. tô dû châde (Nb 196,
12–16) 「私は先ほどあなたが定義したような善が、そもそもこの世にあり
うるものかどうか」。こうしてみると、rerum natura が natura と aller

dingo natura に訳されている場合には、万物の本性の方に意味の力点が置かれ、natura を伴わない alliu ding に訳されている場合には、万物の方に意味の力点が置かれている傾向があるように思われる。さらに、Nb には、natura のみが ding でもって訳されている場合がある。solitus erat. reddere uarias causas latentis naturae = Únde chónða er geá-ntuuúrten mániges tínges tóugenes uuáz táz únde dáz meine (Nb 16 23-25) 「隠れた自然のさまざまな原因を明らかにした」。この場合の natura は、個々の具象物として把えられている可能性が強いように思われる。もう1例、Nb に natura が ding で訳されている。Quid est enim carens animae motu atque compage s membrorum. quod pulchrum ese iure uideatur. animatae rationabilique naturae? = Uuáz íst lib-elôses únde lídelôses dáz sêlemo dinge. sô der ménnisko íst únde rédoháftemo súle scône dúnchen? (Nb 100, 9-14) 「そもそも魂の運動と構造をもたないもので、魂と理性を具えた自然に正当にも美しいと思われるようなものが、何かありますか」。animata rationabilis natura とは、人間を意味し、普遍性を有する個々物として把えられているように思われる。

古高ドイツ語において、ding はいくつかの語を伴って合成語を形成するが、ノートカーにおいても、lugeding と uuechselding があらわれる。uuechselding は、mutabilis natura の訳語として用いられている。Omnium generatio rerum cunctusque progressus mutabilium naturarum = Allero díngo gebúrt únde állero uuéhsel-dingo fárt (Nb 296, 15-20) 「万物 (= 生物) の発生、変化する自然物の全過程」。つまり、人間を含めての森羅万象の動的な働きをこのように訳した。

(6) maht

maht は元来、mugen に由来し、ノートカーにおいてもっぱら potestas, potentia, potentatus, vis, vigor の訳語として用いられており、これらと意味的に「力」という点で対応しているが、virtus の訳語としても

古高ドイツ語の伝統に従ってあらわれている。さらにノートカーにおいては、この *maht* は *natura* の訳語として 1 例用いられている。Quoniam igitur omne iudicium comprehendit sibi subiecta. secundum sui naturam = Unánda állíu chiesunga nâh íro séllero máhte chíuset. táz íro fóre óugôn íst. (Nb 385, 27–386, 2) 「ところで、すべての判断はその本性に従って対象を把握するし」。このように、いかなる筋道によって、「力」を意味する *maht* が *natura* の訳語として選ばれたのであろうか。やはり *iudicium* (*chiesunga*) なる語がかかわっているであろう。この *natura* は *potentia* に近く、「判断力」と解してもよく、従って、*maht* でもって訳されたと思われる。

(7) *natura*, *naturlih*, *naturlicho*

オトフリートにおいて初めて使用されたラテン語からの借用語としての *natura* は、形容詞形 (*naturlih*) 及び副詞形 (*naturlicho*) をもあわせて、ラテン語 *natura* の訳語として、ノートカーにおいてもっともよく用いられている。ここで、特に Nb におけるドイツ語文章内における *natura* は、語形の上から、①ラテン語の活用 (21 例)、②ドイツ語の活用 (3 例)、③どちらか不明 (多数)、に分けることが出来る。ラテン語 *natura* は、Sg N *natura*, G. *naturae* Ak *naturam*, Ab *natura*, Pl N *naturae*, G. *naturarum*, D *naturis*, Ak *naturas*, Ab *naturis* の如く活用し、外来語として、ドイツ語の活用をとっている場合には、*géba* と同様に、sg N *natura*, G. *naturo*, D *naturo*, Ak *natura*, Pl N *naturâ*, G *naturn*, D *naturn*, Ak *naturâ* となろう。無論、すべての形がノートカーの作品にあらわれているわけではない。①のラテン語の活用をとっている場合の例としては、属格 *naturae*、対格 *naturam* が見られるが、ドイツ語文の中であって、明確にラテン語のままとして意識的に用いられている。②のドイツ語の活用をとっている場合の例としては、単数与格 *naturo* (Nb 216, 26, *naturaliter* の訳語として)、複数属格 *naturon* (Nb 228, 4; 314, 6) が見られるが、明らかに外来語としての意識で用いられている。③のラテン語のま

まか、ドイツ語として用いられているかの場合は、語形の上では *natura* にしぼられるが、不明確である。その理由として、第一にシンタックスの上では、単数主格であるが、ラテン語もドイツ語も単数主格は同形であるという点。第二に、シンタックスの上で、単数対格であるので、*natura* という形はドイツ語の活用をとっているのではないか、という点。Nec ullam mili esse naturam = Ünde úbeles natura nehéina uuesen (Nb 235, 29–236, 2)「悪はその本性上存在しない」。第三に、与格支配の前置詞を伴っているが、*natura* という形であるため、ラテン語の活用にもドイツ語の活用にも一致していない、という点が挙げられる。また Np のドイツ語文中、ただ一個所 *natura* が用いられている。Omnis spiritus laudet dominum = alliu geistlichîû natura. lobe unseren trúhtenen (Np 539, 26–540, 1)「息ある者はみな主をほめよ」。この *natura* もラテン語としての形がドイツ語としての形が不明である。恐らく、これらの *natura* という形は、無変化形 (unflektierte Form) として用いられているのではなからうか。まだ、ノートカーにおいては、*natura* は完全に外来語としての地位を占めるに至らず、ラテン語とも、ドイツ語とも言えない流動的な状態にあってある時にはラテン語的に、ある時にはドイツ語的に、ある時には無変化形として用いられたのではないであろうか。完全にドイツ語の語彙の一つに加えられるのは、語末の -a が弱化して -e に至った後の時代においてではなからうか。

意味の上では、訳語としての *natura* (*naturlih*, *naturlicho*) は、ラテン語の *natura* が有している様々の意味に用いられている。ding の個所で挙げたように、*rerum natura* の訳語として、万物としての自然 (古高ドイツ語においては、この意味であられるのは、Nb が唯一であろう) の意味で、また本性、本質の意味等で用いられている。なお Np の *alliu geistlichîû natura* の *natura* は「存在物」の意味であろう。

(8) *rehto*

形容詞 *reht* 「正しい」の副詞形 *rehto* が Nk の一個所のみに、per

naturam の訳語として用いられている。Simul ergo per naturam dicuntur..... = Nû sint réhto diu sáment (NK 137, 17-20)「本性上同時にと言われるのは」。rehto はラテン語 recte と語源的にも、意味的にも完全に対応しており、元々の「真すぐに」から「正しく」と意味を発達させた。ノートカーにおいてなぜ rehto が natura の訳語とされたかと言えば、rehto は recte の意味から、merito「至当に」の意味を得、そこから、「(物)にふさわしい」となり「本性上」の意味を得たと思われる。

(9) selb

Nb においてのみ、natura が、特に sui と suapte を伴って、selb によって訳されている。また、naturaliter の訳語ともなっている。selb は今日の selber, selbst, eigen に相当している。Diuitiae uel uestra. uel sui natura. pretiosae sunt? = Íst ter rihtûom fiure. fóne ímo sélbemo. álde fóne íu? (Nb 98, 24-26)「富が貴重であるのは、あなたの本性によってですか、それともそのものの本性によってですか」。quod pecunia nihil habeat suapte natura. ut his inuitis a quibus posidetur nequeat auferri = Táz íst óuh cnôto ze bedénchenne. táz ter scáz téro túgede án ímo sélbemo nieht nehábeat. ín nemúge man únd-ánches némen díen. déro er íst. (Nb 153, 21-25)「すなわち金銭にはそのものの性質上、所有者からその意志に反して奪われないようにする力が、全くありません」。その他、Nb362, 7 で sui natura が an in selben に、N1376, 21 で suapte natura が fóne íro sélbero に訳されている。また、natura が単独でも selb でもって訳されている。quodsi natura quidem inest. sed est ratione diuersum = Nû nehábet er iz infángen. hábet er iz áber fóne imo sélbemo. únd ist iz imo íonêr ána ungelíh (Nb202, 8-13)「またもしそのような善はなるほど本性上神の中にあるが、しかし理性の上では神と異なっているならば」。これらにあらわれる natura は概ね尊格であり、特に sui, suapte を伴って、物の個有な、特有な本質という意味が強調されるとき、ノートカーはこれを selb でもっ

て訳している。

(10) *slahta, geslaht*

slahta も *geslaht* も原ゲルマン語 **slaha*-「打つ」にさかのぼり得、この語根に様々な接尾辞が付され、多様な意味の展開を示している (E. Seebold: *vergleichendes und etymologisches Wörterbuch der germanischen starken Verben* s. 425–27)。*slahta* は古高ドイツ語で「種、類、素性」と「殺戮、殺害」という、2つの全く異なった意味を有しているが、西ゲルマン語内において異なった意味を展開させたであろう。前者の意味で、ノートカーにおいて、*natura* の訳語として用いられている。形容詞 *geslaht* は、古高ドイツ語で「特有の、自然にかなった」の意味で用いられ、ノートカーにおいて、やはり *natura* の訳語として用いられている。*slaht* は Nb において一個所のみ、*sua* を伴って *natura* の訳語として用いられている。omniaque expetenda. referri ad bonum. uelut ad quoddam cacumen suae naturae = únde állíu déro ze gérønne ist. ze gûote geuuéndet uuerden. sámoso ze íro sláhto hóubete (Nb262, 8–13)「また望ましいものはすべて、いわばその本性の頂点ともいうべき善とかかわりがあることを示しました」。geslaht は *natura*, *naturaliter* の訳語としては、Nk のみに用いられている。ut longuor et sanitas in corpore animalis naturam habet fieri = Álso siechelhéit únde gánzi lébendên corporibus kesláht íst (Nk116, 3–5)「例えば、病気と健康とは、本来動物の身体のうちに生ずることになっている」。Nk116, 21, 131, 9 も同様の表現である。また Nk で *naturaliter* も *geslaht* で訳されている。sed solis quibus naturaliter unum inest = Núbe échert tien daz éina gesláht ist (Nk 123, 13–15)「しかし本性上ただ一つのものが存するものにだけは必ず存しなければならない」。Nk125, 2 も同様である。*slahta*, *geslaht* を用いることによって、「事物の特有性、固有性」が強調されているように思われる。

(11) **tuon**

tuon (nhd tun) の完了分詞 *getan* が Nb の 2 個所において *natura* の訳語として用いられている。et constat eam naturam esse mentium. ut quotiens abiecerint ueras = únde óuh ménniskôn mûot sô getân ist. táz iz sih tero uuârhéite gelóubendo (Nb 55, 25–56, 3) 「また精神の本性には正しい意見を放棄するたびに」。Hic semper eius mores sunt. ista natura = Tíz sînt íro site. súš íst sî getân (Nb61, 16–17) 「そうなるのが運命の常習であり、本性です」。tuon は古高ドイツ語においてラテン語 *facio* の影響の下で、ほぼ *facio* の意味をカバーしているが、完了分詞となって、「(ある状態が) 生ぜさせられた」の意味となり、さらに「～の性質」の意味に発展し、*natura* の有する「本性」の意味に近づき、*natura* の訳語として用いられたと思われる。

また、ボエティウスの *Consolatio* でしばしば「理性的自然、理性を具えた自然 (*rationabilis natura*)」というような表現が見られるが、つまり人間を指しているのもあって、これは一個所 Nb において、直截的に *men-nisko* によって訳されている。Si beatitudo est summum bonum. naturae ratione degontis = Úbe sâlighéit íst daz fôrderôsta ménniskôn gûot (Nb 94, 24–26) 「もし幸福が理性に従って生きる自然の最高の善であるならば」。

以上につき、ノートカーのドイツ語文における *natura* の訳語と作品におけるあらわれ方を表にまとめると次頁のようになる。

全体的に言えることは、ノートカーの作品において、Nb 以外では *natura* の有している原初的な意味の、事物の特性、本性、性質という意味しか使われていず、作品によって訳語に片寄りが見られる。Nb には *natura* の様々な意味があらわれるが、物の本性、特性を表わしている時には、外来語の *natura* をも含めて、様々な訳語が用いられているが、人間をも含めた万物を表わしている時には、*natura* と *ding* しか用いられずに、

作品 natura の訳語	Nb.	Nk.	Ni.	Nc.	Np.
anaburt (-i, -tig)	+	+	+		+
anauuist					+
berohaft				+	
burt					+
ding	+				
geburt		+			
maht	+				
natura, naturlih (-cho)	+		+	+	+
rehto		+			
selb	+				
slahta, geslaht	+	+			
tuon	+				
uuechselding	+				

(natura, naturlih, naturlich については訳語に限っていない)

他の在来語（新造語をも含めて）は用いられていない，という特色がある。このことは何を意味しているであろうか。ノートカー以前の翻訳文献においては，Grundsprache の natura は「事物の本性，特性」の意味にしか用いられていず，ボエティウスの Consolatio において初めて，「万物・自然」の意味での natura があらわれている。これをドイツ語圏で，Glossen を除いて，最初に翻訳したのはノートカーであり，ここに初めてあらわれる概念，「万物・自然」という外来思想を彼は，在来語によってではなく，直接的に natura でもって表わしたのではないだろうか。従って，ノートカーは，作品によって，訳語を使い分け，またコンテキストによって，そのコンテキストにふさわしい訳語を選んでいく。

5. おわりに

ラテン語の natura は元々の，「事物の特性，本性」と φύσις の影響を受けた「万物・自然」という2つの大きな意味を有している。ギリシア・ゴート語，ラテン語・古高ドイツ語文献においてあらわれる，そのほとんどは前者の意味においてである。後者の意味であらわれるのはボエティウスの Consolatio のノートカーの翻訳においてである。新プラトン主義の

色彩の強いボエティウスの意味する「万物・自然」は中世キリスト教のそれとおのずと異なったものであろう。ボエティウスにあっては、自然は有機的存在として、神、人間をも含んでいるが、中世キリスト教においては、神対自然・人間という秩序が歴然と打ち立てられている。しかし、ノートカーの *Consolatio* 翻訳においては万物・自然を意味する *natura* は外来語 *natura* によって表わされているので、ボエティウスの新プラトン主義の自然と中世キリスト教的な自然との区別を明確に求めることは不可能である。だが、一個所、*Consolatio* 第2巻散文2において、*cum produxit te natura nudum ex utero matris*「自然があなたを母の胎内から裸のあなたを生んだ時」はノートカーによって、*Tô dû náchet kebóren uuúrte* (Nb 66, 26–27) と、*natura* は訳されずに、全体は受動態で訳されている。これも、ノートカーが新プラトン主義的解釈を避けたわずかばかりの証しではなかろうか。

いずれにせよ、中世に大きな影響を与えたアウグスティヌスとボエティウスの *natura* 観が古高ドイツ語文献にいかに関係しているかを知ることが出来なかったが、このことに関しては今後の検討課題としたい。

参考文献

- L. Cooper: A Concordance of Boethius 1928
- U. Daab: Die althochdeutsche Benediktinerregel des Cod. Sang 916, 1959
- U. Daab: Drei Reichnauer Denkmäler der altalemanischen Frühzeit 1963
- J. Jaehrling: Die philosophische Terminologie Notkers des Deutschen 1969
- W. P. Lehmann: A Gothic Etymological Dictionary 1986
- E. Luginbühl: Studien zu Notkers Übersetzungskurst 1970
- Nb = Notker des Deutschen werke hg. v. E.H. Sehart/T. Stark Boethius, De Consolatione philosophiae 1966
- Nc = Notker der Deutsche, hg. v. J. King, Martianus Capella, De nuptiis philologiae et Mercurii 1979
- Ni = Notker der Deutsche, hg. v. J. King. Boethius Bearbeitung von Aristoteles' Schrift, De Interpretatione 1975
- Nk = Notker der Deutsche, hg. v. J. King, Boethius' Bearbeitung der Categoriae des Aristoteles 1972

Np = Notker der Deutsche, hg. v. Tax. Der Psalter 3sde 1979–83

Otfrids Evsangelienbuch, hg. v. o. Erdmann 1882 repr 1979

J Pokorny: Indogermanishes etymologisches Wörterbuch Bd 1

E. Steinmeyer/E. sievers: Die Althochdeutschen Glossen 5 Bde 1968

W. Streitberg (hgw: Die gotische Bibel 1965

C. Watkins: The American Heritage Dictionary of Indo-European Roots
1985